

*Kanicolan! Golfery*



# MAJIO

ロングインタビュー

# LONG INTERVIEW

MAJIO × “絵描き”

MAJIO × “青森”

MAJIO × “版画”

MAJIO × “版画界”

MAJIO × “クリエイションいろいろ”

MAJIO × “総合プロデュース”

MAJIO × “東京・町田”

MAJIO × “SOLO GROUP”



# MAJIO × “絵描き”

まずはじめに、MAJIO さんが絵描きになったきっかけをお教えてください。

小さい頃から絵は好きで、そして映画も好きだったんですよ。

高校生のときに進路の話になって。高校はとりあえず入った工業高校の電気科。進路を決めるとなれば、出身は青森なので、東北電力とかいわゆる安定したところを目指すのが普通。だけど映画が好きだったし、普通には生きたくなかったこともあって、両親に「俺、映画監督になりたい」って言ったら2人とも「いやいや、今真面目な話してるんだぞ」って言われて。いや俺めっちゃ真面目に喋ったのって思って。

それでも道としては映画学校とかもあるじゃないですか。今度は高校の担任の先生にも言ってみたんですよ。「映画監督になりたいんです」「いや真面目な話してるんだ」って先生にも言われて。

その頃は突き通すほどの根性も熱意もなく、自分でも「真面目に言っていないのかな？」って思っちゃって。とりあえず大学に4年間行って、その間に本当に何をやりたいのか決めようって思ったんです。4年間が欲しかっただけなので、入った学科は経営経済学科っていう全然分野が違うところなんですけど（笑）。

大学にいる間に、あらためて絵とかをやってみて、自分で手を動かすの好きだな、やっぱり面白いなって気持ちが固まっていたんですよ。それでまた大学卒業の頃に、就職活動も何もしてなかったんで、また両親に「どうすんだ」って聞かれた時に「俺は絵描きになる」と言って、母ちゃん号泣。「もう親子の縁は切る！」とか言われて、「あ、切ってください」「え、即答？」みたいなやりとりで余計泣く。それで、そこから先はもう口も利かないじゃないですか。でも実家に居続けて（笑）。一緒に暮らしているながら、家庭内別居みたいな感じ（笑）。

そんな時、ちょうど青森の駅前に広場や新しい店舗ができて、お店を1つ貸すから、そこで経営的なことをやってみようという動きがあったんですよ。それで事業計画を出したんですけど、ざっくりしすぎて俺は落選して（笑）。でも屋根がある場所にテントとかを貸すから使っていいよという話をいただいて、絵やグッズを作ってはそこで売ってたんです。いつ寝てるんだというくらいに作ってるんで、さすがに親も「こいつ本気なんだな」と思ったようでやんわり「許してやるか」という雰囲気になりました。

ドローイングから巨大オブジェ、版画、立体など、制作物のジャンルが多岐に渡りますが、当時と今と作っているものから変化はありますか？

その頃の方がより一層いろんなものを作っていて、しっちゃかめっちゃかでしたね。何でもそうだけど、ある程度できるまでって何をやっても楽しい。20代は作品自体の完成度は低いけど、多分すごく生き生きとしてた。「絵描きになるんだ」ってすげえ覚悟してましたしね。ただ絵を描くっていうよりかは「それで生活するんだ」っていう気持ちが強かったです。

今は知識と腕がついて、大きいものや本当にいいものを作れるようになったけど、あれこれやりたいのは変わらずです。

あと青森って、俺がいた頃はアートに興味のある同年代がそんなになくて、「あーと？何それ？」って感じの土地柄でした。ねぶたとかあるのにね。だから、当時は本当にアウトローって感じで、同年代でライブペイントをガンガンやってたのは俺だけでした。

“アート”についての自分の考え方も、何かを作るのは好きだけど、「アート・芸術ってスバラシイものなんです」という気持ちではなくて。でも目立ちたいから、地元の新聞やテレビ、ラジオで取り上げてもらったときも、「アートとかクソだ」とかイキがって、地元アート団体に嫌われる。そんな頭の悪い尖り方もして、30歳手前まで、結構長いこと青森で活動していました。



# MAJIO × “青森”

**ねぶたの話が出ましたが、山車を引いたりされたことはあるのですか。**

ねぶたって普通に町内会ごとにあるんですよ。大きいものは駅前を封鎖してグワーって行くんですけど、それよりも小さい道路を通れるサイズの色々な種類が町々にあって、すごく身近だったんです。小さい頃は太鼓の音が聞こえてきて、外に出たら近所の連中も出てきたりして、「あっちかな？」って音の鳴る方へ行行って、「ああやってる。おぉ〜」っていうのが普通でした。もちろん自分も引っ張りましたよ。

**作品にもねぶたのテイストを感じるような気がします。**

地元にはねぶたを描きたいとは全然思ってなかったんですよ。あまりにも身近にありすぎて。でも、東京に出てからの方がつながりを深く感じるっていうか、作っているものがそれに近いというか……。派手で、ごちゃごちゃしてて、でかくて光って、フェスとかで制作するのが楽しいなって。それってほぼねぶたと一緒じゃんって思います。

**青森出身の方って、突き抜けている方がなんだか多い印象です。**

何かそういう土地な気がしますね……。最近はどうでもなくなっているけど、青森って本当に全部の季節が際立ってるんですよ。もともと住んでいた弘前市って、桜の三代名所なんです。東京出てきた時に、「こっちの桜元気ないなあ、今年は病気なんだなあ」って本気で思ってて（笑）。そのくらい違うんですよ。夏はねぶたもあり、秋は紅葉するし、冬なんて強烈に苦しいし。アップダウンが激しいから、精神的なピークが高いのかも。下がる人もいるけど、上がりやすい人もいる。作家でもすごい人多いですもんね。棟方志功\* だったり太宰治\* とか。

\* 棟方志功（むなかた しこう）：存在感あふれる女性美や宗教的な表現で独自の世界を作りあげ、世界的にも評価された版画家。

\* 太宰治（だざい おさむ）：昭和を代表する文豪の一人。『人間失格』『走れメロス』などで知られる。

寺山修二\*も青森にゆかりがありますよね。

そうなんです。まだ青森に天井棧敷\*の元メンバーも結構いるし。

その繋がりと言えば、“舞踏”っていう前衛ダンスのような、白塗りで踊るジャンルがあるんですけど、その踊り手の人が俺の師匠なんです。俺は絵描きだけど、師匠は踊り手。寺山さんとも一緒にやってた方で、昔話もかなり聞きました。

その師匠がライブペイントとか色々誘ってくれたんですけど、絵を描くこととは違うことばかり教え込まれて。「ここで公演をするとすれば、まずどこからどう見えるか全部把握しろ」と言うわけですよ。「あっちがステージだとして、いろんな場所に立ったとして、照明がどう当たるか。それを分かった上で描かないと全然伝わんねえんだぞ」って。

師匠から総合的に場を見るということを教わったし、ある意味高校生の時に憧れた映画づくりに近いことができたなと思います。これが結局フェスとかで大型オブジェを作ることにまた繋がっていくので、青森に生まれて良かったなと思います。

おお〜全部今に繋がっていきますね。

東京に出てからも繋がってきまして。東京出てきてすぐって生活が不安定じゃないですか。「どうしようかな〜」って言ってたら、師匠がNHKの大道具を紹介してくれて。そこでモノの組み方とか、場の立ち回り方とか、舞台監督の動き方を見て、どうすれば場がうまく回るのかを勉強しました。

それからフェスの仕事や祭りのプロデュースもやるようになって、いろんな職人さんと一緒にデカイものを作ったりすることも結構できるようになりました。現場で組み立てもするけど、指示出しもする立場にもなったり、絵描きだけど絵描きじゃない能力が身についたんですよね。

だから青森にいたことは、今となってはすごくアドバンテージですね。下手に早く出なくてよかった。18歳で出てたら、多分こっちの流行りに流された感じでやっていたんじゃないかな。

\*寺山修司（てらやましゅうじ）：詩人、歌人、劇作家、小説家、評論家、作詞家、エッセイスト、映画監督、写真家など、多彩な表現活動を展開したマルチアーティスト。  
\*天井棧敷（てんじょうさじき）：寺山修司主宰で「演劇実験室」を標榜した前衛演劇グループ。アングラ演劇の代表的な劇団で、1967年から寺山の亡くなる1983年まで活動した。

# MAJIO × “版画”

MAJIOさんは、巨大オブジェはもちろん、木版画のイメージもあるのですが、版画とはどんな出会いだったのですか？

ライフワークですね〜。版画はもう死ぬまでやりたくて。めっちゃ体力いりますけどね。マジでヘトヘト。でも昔は全然楽しくないと思ってました。すぐにできないし、インクの乗せ具合も意外とうまくいかないし、なんか嫌いだったんです。

20代後半くらいだったか、苦手なことをやってみようということが流行って。それで走ることと版画をやってみようって思ったんです。そしたら版画がめちゃくちゃ面白かったんですよ。シンプルで難しすぎて「やばい！」って。

同時に、今どきこれだけ時間をかけて何かをするってカッコイイなと思って。タイパやらなんやら言うけど、膨大に時間をつぎ込むことがより意味持つというか……。版画って省略することが不可能なんですよ。コピペはできないし。でも故に、全てが作品にちゃんと籠るような気がして。しかも、それを何枚も複製して、スッと人に渡せることもいいですね。

ここがまた青森と繋がる話で、地元でアートの話なんか一つも出なかったけど、誰かの家とか居酒屋とか公民館とか、あらゆる場所に棟方志功の絵があるんですよ。本物が偽物かも知らないけど、棟方志功だないと見れば一瞬でわかる。それぐらい生活に入り込んでるアートがあるってすごいことだなあと思って。しかも世代とか趣味とか超えて。版画もやるようになった時に、「え？ どういうこと？ なんでどこにでもあるんだ？」って思ったんです。

棟方志功のような版画がしたいわけではないんですけど、それ自体にはすごく憧れていて。版画だったらいっぱい増やして、色んな人に渡せるなって。どれだけ誰かの家に広がったかとか、ちょっと想像しながらやるのが楽しいですね。



# MAJIO × “版画界”

版画といえば“版画界”と銘打って、SNS でただただ版画を彫る様子を配信されてますが、一体何なのでしょう。

毎年、春・夏・秋・冬の4枚、季節でめくってもらう版画のカレンダーを作っているんです。この版画に没入する制作期間を“版画界”と言っています。

もともと普通のカレンダーを作ってたんです。作家さんってよくカレンダーを作るじゃないですか。作り始めたときは12ヶ月ちゃんと数字を入れていて、絵柄は過去の作品をリミックスしたり新作を作ったりして、それを普通に綴じて、というのを何年もやってました。

ある時「ちょっとこれ版画でやってみようかな」って思い立ったのが始まりですね。当初は今の半分くらいのサイズで5~6年続けてたんですけど、そのうち「小さくてヤダな」って思って、みんなに「来年から数字がない大きいカレンダーにする」って言いました。というのも、全国で買ってもらってるんですけど、季節が来る時期って地域によって違うんですよね。例えば南の地域では3月に桜が咲くけど、青森では5月だったり。じゃあもういいか、春が来たら春にしてっていうスタイルになったのが、10年、11年前くらいのこと。

このスタイルになって何年か経って“版画界”と呼ぶようになりました。なんか酸素が薄いし、すげー過酷だと思って。“版画界”の間は、数ヶ月スイッチを入れっぱなしでいる感じ。ちょうど定期的にオファーが収まることもあって、ON/OFFなくどっぷり入っています。1日に12時間は彫るから時給にしたらちょっと悲しい話になって……でも結果的に買ってもらえるのでいいんですけど。

期間としてはざっくり100日ぐらい。ただ構想を練るのは遥か前からやってるので、それ以上はかかってます。カッコつけたまま100日やり切るみたいな話で。今どき「俺寝てねーし」って感じに痺がって、でも愚直に全部やりきるっていうことも好きですね。



**MAJIO さんの SNS で版画界についての投稿を見ると、時間について考えてることが多いなと思います。**

自分の足で動くこととか…人間のスピードって分かっていた方がいいんじゃないかなって思います。スマホとかを便利に使うけど、勝手にアップデートして「はい明日から動きが早くなります」って言われても、自分自身はそんなことないですからね。

“版画界”ではどっぷり時間を使ってるけど、長期間やるための時間の使い方や段取りはすごく上手くなるし、実は自分なりの最速を更新してるってことも面白く思います。

SNS ですごく助かっているのはライブ配信。あまり配信を見てる人はいないですけど(笑)、見た人にとっては強烈みたいで、「配信見て買いました。本当に全然彫る作業進まないですね」って結構言われます。

制作の長い時間も含めて作品と思ってます。本当に彫らなきゃ進まないし、スキップできないし、雑にやった瞬間ミスるし。これが 100 日分か～！って思ってもらえればいいなと思います。

# MAJIO ×

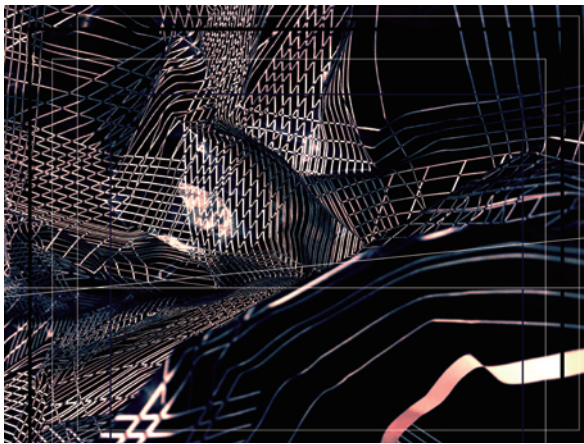
## “クリエイションいろいろ”

作品のモチーフが海や太陽など多岐に渡りますが、どこからイメージが浮かんでくるのですか？

基本的にはすごそうなもの、大いなるもの……という感じのモチーフになっていますね。地元の弘前には「津軽富士」って呼ばれている岩木山もあって、そんな自然を見て育ってたり、四季の美しさを見ていましたし……。あと釣りも好きですね。そんなことがベースにあるのかも。

無骨な人工物のようなモチーフも見られますよね。

直線も好きっていうか……VJ\* っぽいこととか、色々やってたのもあって。キュウリ以外は全てモチーフかな。



\*VJ：ビデオジョッキー。音楽ライブやクラブイベントで、流れている音楽やパフォーマンスに合わせてリアルタイムに映像を操作し、空間を演出する。



### 巨大オブジェを一番最初に作ったのはどんな時だったのですか？

その片鱗のようなことは結構して……。青森でライブペイントやることって当時は珍しくて、あったとしても音楽イベントのちょっと端っことかその程度で「目立ってないのはイヤだな」「ステージでやらしてくれ」って言ったのがきっかけで始めました。日食みたいな演出をしたり、謎の照明を仕込んでみたり、ちょっとずつギミックを入れながら手探りでやっていきました。思うようにいかないことも散々経験しましたね。だから、本当に完璧にやる、とにかく考え抜かないとうまくいかないというスタンスが生まれました。

それから大道具での仕事やいろんな現場の経験を経て、徐々にパーツで組んでいくのが面白くなって思ってきました。やり始めたころは、例えば鳥を作るとしたら羽を何層かにしてみたりしていたんですけど、今はニョロっとした抽象的なパーツをいっぱい作って、組み合わせて進化させています。

### 巨大オブジェには設計図はあるのですか？

現場によって面積も違うので、常に決まった位置ではできないんです。一番考えるのはやっぱりその骨組みをどう配置するっていうことを考えますね。パーツをカチカチはめていくんじゃなくて、その場で作っている感覚です。

# MAJIO ×

## “総合プロデュース”

さまざまなテイストで作品を作られています、記憶に残った制作があれば教えてください。

青森で「ミナカダ祭」っていうお祭りをプロデュースした時ですかね。まさかりの形をした下北半島、大間のマグロなどで有名な地域。そこに薬研（やげん）温泉っていう温泉地があって、その開湯 400 年を記念した 4 年間の企画でした。

薬研温泉のある大畑町の神社の神主が同い年で、一緒に祭りを仕掛けました。そいつは将来的には神社を継ぐから、それまでは自由にさせてもらっていて、LA で DJ をして食べていたやつなんです。彼は当時の仲間たちと砂漠でパーティーしたんですけど、その頃 SNS はないからチラシを配って告知したはいいもの、番地も何もないからお客さんは誰も辿り着けなかったらしくて、仲間達だけ（笑）。そんな感じの面白いやつだったので、俺はライブペイントや VJ、彼は DJ でセッションしてずっと遊んでました。

そして、そいつの地元にも毎年通うようになり、あるとき薬研温泉の 400 年祭をやるって話が出たんです。俺は長野の渋温泉っていうところで、温泉と音楽のイベントに関わった経験があったので紹介してもらえて、俺とその神主でプロデュースすることになりました。長年通って、その土地も、出会った人々も大好きになったので、ひたすらにこの企画に打ち込みましたね。いろんな人も巻き込みました。カウントダウンも含めて 4 年間やったんですけど、それが人生で一番過酷で、最高にやりがいのある日々でしたね。

**祭りではどんなことをやったのですか？**

基本はその土地の伝統芸能、それにプラスで何かをする感じでした。どういうわけかその土地に繋がりがあったガーナの国立舞踊団みたいな超由緒正しい人が太鼓を叩いたり、俺の方で電子音楽系の人を呼んだり。伝統芸能と今のものを交互にステージでやってもらいました。さらに温泉地の企画なので、ステージから真向かいのところに、7~8m ぐらいの足湯を 3 本作ってもらって、それに入りながらライブを見てもらってましたね。

もう圧倒的に大変で。誰々は何をして、あれはどう、これはいつまでに連絡をくれと言う長文をメールリストで毎日送ってました。細かいことはその神主としょっちゅう長時間電話して……取り憑かれてましたね、その4年間は。

田舎の山の、人口7000~8000人ぐらいの町だったんですけど、最終的には山奥に1万人くらいを呼び込みました。全く絵描きの話じゃないですけどね（笑）。

**絵描きで走り始めてから、だんだんプロデュースもするようになったのですね。**

もともと映画監督になりたかっただけに、全体を考えるのは好きなんですよ。映画監督みたいに全体を見ることが、祭りやねぶたの魂があることの、ちょうど中間がプロデュースするということに繋がったのかもと思います。

思い返せば、師匠ともいろんな場を作ってたし、地元のDJイベントや温泉地の企画で仲間と色々空間を作ったり、常にちょこちょこやっていました。それにプラスで大道具の経験から、大人数で動いた時の立ち回りと指示を勉強して、だんだん大きいことを企てる流れになりました。それはやっぱり好きだから面白いんですよ。

**現場人って感じですね。本当に。**

好きなことは頭に入るので、誰かに聞かれても大体答えられるんですよ。苦手なことは一つも覚えられないですけど（笑）。何か作るのが好きだし、みんなで作ることも、総合的に見ることも好きですね。

薬研温泉の祭りは400年目で終わって、2年後にその神主のいる神社でのお祭りにも関わった後、自分の活動もちゃんとしようってなって、最近は結構ソロ活動に重心を置いています。





# MAJIO × “東京・町田”

全国を飛び回っている MAJIO さんですが、数年前まで町田に拠点があったそうですね。

地元の DJ 仲間が آپマンショップの店長をしていて、東京で家賃が安くて、町がごちゃごちゃしていなくて、ある程度スペースがあって、車を止めれる場所を探してもらったんです。全然よくわからないで決めちゃったんですけど、ホームセンターとかも近くにあるし居心地は良かったです。気に入ってましたね。地元の町ともそんなに雰囲気は変わらなかったです。

東京に行こうと思ったきっかけは何だったのですか？

地元でやることをやったからかな。

「毎回面白いことを」って思って、組み替えたり、新しくしたりとやっているけど、途中からみんなが「MAJIO が変わったことをやっている」って思うだけで、それ自体を解釈しようとする人が減ってきた感じで。一方で、ゲストで来ているアーティストの人はすごく面白がってくる。「あ、ここが変わってこうなったのか！」って感動してくれて。

地元で結構いろんなことができたので、すぐ外へ出たいとはあんまり思ってなかったんですが、やっぱりちゃんと見てくれる人が集まる場所に行こうかなって思ったんです。

まあ東京だったらいいんじゃないって思って、町田がどの辺にあるかも知らず出てきました。「あ、町田って結構都心から離れてるんだな」って住んでから気づきました(笑)。結局は都内とかいろんなところで活動しています。ミナカダ祭の時は青森と東京と行ったり来たりの生活で、祭りの最終年は4ヶ月ぐらいは青森にいましたね(笑)。

# MAJIO × “SOLO GROUP”

今回のソログループ展、100点以上の作品を展示されるとのことですが、どのように作品を選びますか。

なるべく選ばない。なんでも持ってきます。

いろんな側面が誰にでもあると思うんですけど、それを無視しないというか、受け入れようというのが作品と自分自身の哲学なので。何かを省いて自分らしいって言うのは、ちょっと苦しいというか、あれもこれもいいんじゃないって方が正しいと思うんです。

日本人だからって和食だけ食べてって話じゃなくて、イタリアン食おうが中華食おうが良い。そこに関してはみんな自然とそう思うけど、意外と絵ってそうじゃないことが多い気がして。例えば「この作家はこういうのを描く」という打出しをしたり、選んでそうしてる人が多い気がします。

でも根本的に描き始めた頃って、いろんなのを描いて面白かったじゃんって。そこを大事にしたいですね。なので全部持っていきます。タイトルのまんまです。自分の中のグループを認めようって感じかな。

**最後に一言、見に来る人へメッセージをどうぞ！**

何日か来てください。色々あるから。例えば気に入ったお店とか行っても、ずっとあったのに急に目入るものとかあるじゃないですか。「あれ、こんなんあったっけ？」って。そういうことが起きるから何回も来てほしい。フォーカスするものがある日ごとに変わったり、時間や天気によっても違うかもしれないですし。何回も来てください！